
なら植防ニュース

日植防シンポジウム

植物防疫をどう教えるか

1 月 16 日に日本教育会館一ツ橋ホールで日本植物防疫協会主催のシンポジウムが開催された。開会に先立ち、上路理事長から、農業は転換期にあり、競争力や魅力の強化が期待されている。研修会を通して関係者の実践力向上を図り、農業に対する理解、人材養成、技術の伝承などの課題について、そのあり方を考えていただく機会としたとの挨拶があった。

岐阜県農技センターの天野氏は、指導機関への相談と対応について話題提供した。農薬の適用作物や、短期暴露評価導入に伴う使用基準の変更を使用者に周知するには、分かり易い農薬ラベル、指導者向けの手引き書、正確な情報発信と指導、対応事例情報の共有、研修対象範囲の拡大等の課題を提起した。

宮城県普及センターの伊藤氏は、人材育成と対応の実態について報告した。植物防疫は農業生産に必須であり、普及職員に対する病虫害診断技術や植物防疫関連法令の研修機会確保が必要であるとされた。

農薬工業会の廣岡氏は、農薬に対する正しい知識の普及と理解促進に向けた活動状況を紹介した。より多くの人の参加を促すために、マスメディアを積極的に活用し農薬の役割や安全性を PR する場を開設した。番組では、農業者から消費者への農薬の有用性が説明され、消費者の体験が相まって説得力が向上した。職員研修では、食の安

一般社団法人奈良県植物防疫協会

〒633-0046 桜井市池之内 130-1

TEL0744-47-4861 fax0744-47-4862

全性を切り口にして農薬の情報を提供し、科学的な考え方を啓発している。

島根大学の巢山氏は、植物防疫教育について講演した。総合防除学や農薬環境科学の講義に PC 端末を配布し、学生から回答を得て進めるアクティブラーニングを活用している。双方向の講義進行によって防除や農薬の必要性、リスク管理の理解が進んだ。また、農薬工業会の教育活動奨励金を得て、メーカーや研究機関から講師を招き、人の顔と名前が見える講演を行っている。実務経験者から直接話を聞くことにより、農薬の開発や普及、現場管理等への関心が高まった。

全農薬の宮坂氏は、農薬の販売や指導者には、現場で病虫害や雑草防除の処方箋を書ける専門家人材が必要であり、研修教育の必要性を強調した。

総合討論では、教育、消費者、技術者の視点から討論が進められた。農薬学は依然として重要であり、OB との交流や学会でのセミナー等を通じて PR の場を拓いている（工業会）。食の安全展示や農園を使った消費者団体との交流によって農薬への理解を啓発（東海農政局）。消費者は病虫害被害の実態を経験すると農薬や防除の必要性が理解される（日植防）。こうした消費者や学生を対象とした取り組みが植物防疫の重要性の認識につながるとした。

カキ病害虫の最近の発生状況

奈良県果樹・薬草研究センター 杉村 輝彦

近年、極端な高温や低温、集中豪雨などの頻度が高く、その影響を受けて病害虫の発生パターンが変わりつつある。ここでは、主にカキ病害虫の最近の発生状況について紹介する。

1. 果樹カメムシ類

本県ではチャバネアオカメムシの発生を予測するため、県下 18 地点で落ち葉を集めて、成虫の越冬量を調査している。越冬量はカメムシ類の前期発生量（世代が交代する 8 月まで）と関係しており、大発生年となった平成 26 年までは、多発年と少発年が交互に繰り返されてきた。このパターンでいくと平成 27 年は少発年、平成 28 年は多発年となるはずが、2 年続けて中発年となった。その後、平成 29 年は少発年となったが、本年は越冬量調査から多発が予想される。

カメムシ類の発生量は、本来の餌であるスギ・ヒノキの球果の多少と関連しており、カメムシ類多発年の前年の球果は多く、少発年の前年は少なく、中発年の前年はその中間ぐらいと観察された。果樹では果実を多く着けた翌年は少なくなる隔年結果があるが、スギ・ヒノキの球果にも当てはまるのかもしれない。

2. チャノキイロアザミウマ

チャノキイロアザミウマは主に渋柿の果実を加害すると果面に帯状の模様ができる被害が発生し、平成 27 年には県下全域で多発した。それまでは、開花始め頃の防除を行っていれば、大きな問題になることはなかった。この年は冬～春が温暖であったことからカキの生育が進み、早い地域では 5 月の連休ぐらいから開花が始まるという近年にはない状況となったことで、防除のタイミングが合わず多発を招いたと推測さ

れた。実際、その翌年の平成 28 年はカキの生育は早かったが、開花始め頃とその後の防除を徹底した結果、多発前の被害程度に落ち着いた。ところが、カキの生育が平年並みであった平成 29 年は、同一地域でも多発園と少発園が混在するという状況になった。

発生状況を把握するために黄色粘着トラップを設置して調査したところ、カキ園周辺の常緑樹付近では 4 月上旬に誘殺され、カキ園内では防除が行われて誘殺されなくても周辺部にはかなりの虫数が存在することが判明した。このことは、防除を行っても虫数が多い地域ではカキ園以外あるいは放任園等で増殖した虫が定期的にカキ園内に飛び込んでくる可能性を示している。現在、発生ピーク予測に基づく防除適期の検討を行っているが、発生が多い地域では地域ぐるみの一斉防除が効果的と考えられる。

3. 炭疽病

炭疽病は 5 月に台風が来た平成 23 年に多発し、その後は生産者が防除を徹底したことから、平成 26 年には多発前の発生程度まで減少した。ここ数年は、9～10 月に降雨が多く、果実での発生が多い園が見られ、増加傾向にあるので注意が必要である。平成 23 年まではほとんど発生が見られなかったにもかかわらず、その年に多発したということから、菌はどこ園でも少なからず存在すると考えられる。菌（カビ）の胞子は雨滴で飛び散るので、風雨が強いときは特に注意が必要である。また、果実着色期以降は特に感染しやすくなるので、発生園では発病果の処分はもちろん、台風通過前後の防除が不可欠である。

シンポジウム 植物防疫をどう教えるか

1月16日に日本教育会館一ツ橋ホールで日本植物防疫協会主催のシンポジウムが開催された。開会に先立ち、上路理事長から、農業は転換期にあり、競争力や魅力の強化が期待されている。研修会を通して関係者の実践力向上を図り、農薬に対する理解、人材養成、技術の伝承などの課題について、そのあり方を考えていただく機会としたいとの挨拶があった。

岐阜県農技センターの天野氏は、指導機関への相談と対応について話題提供した。農薬の適用作物や、短期暴露評価導入に伴う使用基準の変更を使用者に周知するには、分かり易い農薬ラベル、指導者向けの手引き書、正確な情報発信と指導、対応事例情報の共有、研修対象範囲の拡大等の課題を提起した。

宮城県普及センターの伊藤氏は、人材育成と対応の実態について報告した。植物防疫は農業生産に必須であり、普及職員に対する病害虫診断技術や植物防疫関連法令の研修機会確保が必要であるとした。

農薬工業会の廣岡氏は、農薬に対する正しい知識の普及と理解促進に向けた活動状況を紹介した。より多くの人の参加を促すために、マスメディアを積極的に活用し、農薬の役割や安全性をPRする場を開設した。番組では、農業者から消費者への農薬の有用性が説明され、消費者の体験が相まって説得力が向上した。食育担当の教

奈良県植物防疫協会 岡山 健夫

職員研修では、食の安全性を切り口にして農薬の情報を提供し、科学的な考え方を啓発している。

島根大学の巢山氏は、植物防疫教育について講演した。総合防除学や農薬環境科学の講義にPC端末を配布し、学生から回答を得て進めるアクティブラーニングを活用している。双方向の講義進行によって防除や農薬の必要性、リスク管理の理解が進んだ。また、農薬工業会の教育活動奨励金を得て、メーカーや研究機関から講師を招き、人の顔と名前が見える講演を行っている。実務経験者から直接話を聞くことにより、農薬の開発や普及、現場管理等への関心が高まった。

全農薬の宮坂氏は、農薬の販売や指導者には、現場で病害虫や雑草防除の処方箋を書ける専門家人材が必要であり、研修教育の必要性を強調した。

総合討論では、教育、消費者、技術者の視点から討論が進められた。農薬学は依然として重要であり、OBとの交流や学会でのセミナー等を通じてPRの場を拓けている（工業会）。食の安全展示や農園を使った消費者団体との交流によって農薬への理解を啓発（東海農政局）。消費者は病害虫被害の実態を経験すると農薬や防除の必要性が理解される（日植防）。こうした消費者や学生を対象とした取り組みが植物防疫の重要性の認識につながるとした。

登録農薬失効情報(2017. 12.1~2018. 2. 28) 農林水産消費安全技術センター(FAMIC)の登録農薬失効情報より抜粋

登録番号	農薬の種類	農薬の名称	申請者名(略称)	失効日 月/日/年
殺虫剤				
14042	メタアルデヒド粒剤	ナメトリン	白元アース	12/25/17
16945	P A P 粉剤	エルサン粉剤 2 D L	日産化学	01/27/18
19113	アセタミプリド水溶剤	日農モスピラン水溶剤	日本農薬	01/23/18
19474	テフルベンズロン乳剤	ヤシマノーモルト乳剤	協友アグリ	12/25/17
19527	ダイアジノン粒剤	家庭園芸用ホクコーダイアジノン粒剤	北興化学	02/07/18
22321	アクリナトリン水和剤	アザミバスター水和剤	エスティーエス	01/21/18
殺虫殺菌剤				
16941	エトフェンブロックス・カスガマイシン・バリダマイシン・フサライド粉剤	ホクコーカスラブバリダトレボン粉剤 D L	北興化学	12/25/17
19517	エトフェンブロックス・テブフェノジド・ブプロフェジン・フサライド・フルトラニル粉剤	ワイドナー 2号 F 粉剤 D L	日本農薬	02/07/18
21007	ジノテフラン・メトミノストロピン粒剤	バイエルオリブライトスタークル 1 キロ粒剤	バ イル	01/08/18
21650	M E P ・ T P N 粉剤	住友化学スミチオンダコニール粉剤 D	住友化学	02/22/18
21652	イミダクロプリド・プロベナゾール水和剤	側条オリゼメートアドマイヤー顆粒水和剤	バ イル	02/22/18
殺菌剤				
7814	硫黄くん煙剤	サルファグレン	三光化学	12/27/17
12796	チオファネートメチル粉剤	トップジンM粉剤	日本曹達	02/14/18
12800	チオファネートメチル粉剤	ヤシマトップジンM粉剤	協友アグリ	02/14/18
13489	フルオルイミド水和剤	スパットサイド水和剤	クミアイ化学	01/13/18
13675	生石灰	マルイゲタクン印ポルドー液用生石灰	訓子府石	02/07/18
15951	イソプロチオラン・ピロキロン粒剤	フジトップ粒剤	日本農薬	02/21/18
19540	プロベナゾール粉剤	ホクコーオリゼメートパック	北興化学	02/10/18
19547	フルスルファミド粉剤	ザ・つまごい	三井化学	02/26/18
20024	シプロコナゾールくん煙剤	アルトくん煙剤	シジエント	12/26/17
20272	メトミノストロピン粒剤	オリブライトパック	バ イル	12/10/17
20277	イミベンコナゾールエアゾル	マネージエアゾル	北興産業	12/10/17
除草剤				
15985	ピラゾキシフェン粒剤	パイサー粒剤	石原産業	02/21/18
15989	ピラゾキシフェン・プレチラクロール粒剤	石原ワンオール粒剤 8	石原産業	02/21/18
18559	エスプロカルブ・ジメタメトリン・ピラゾスルフロンエチル・プレチラクロール粒剤	チバガイギー・スパークスター 1 キロ粒剤	シジエント	12/24/17
18566	カルブチレート・M D B A 水和剤	ツインカムフロアブル	エスティーエス	12/24/17
18588	イマズスルフロン・ダイムロン・メフェナセット粒剤	バイエルバトル粒剤	バ イル	12/24/17
20289	ジメタメトリン・ピリブチカルブ・プレチラクロール・ベンスルフロンメチル水和剤	[D I C] クサナイン L フロアブル	日本曹達	12/10/17
20290		クサナイン L フロアブル	クサナイン L フロアブル	12/10/17
20291		ホクコークサナイン L フロアブル	北興化学	12/10/17
20301	シハロホップブチル・ダイムロン・ベンスルフロンメチル・メフェナセット粒剤	ホクコーイネグリーン D 1 キロ粒剤 51	北興化学	12/10/17
20975	カフェンストール・シクロスルファミロン・ダイムロン	レオンジャンボ	住商アグリファクター	12/20/17
20978	メタミトロン水和剤	ハーブラック顆粒水和剤	アグマジパン	12/24/17
20982	ピラゾスルフロンエチル・ピリフタリド・プレチラクロール粒剤	日産アピロスター 1 キロ粒剤	日産化学	12/24/17
20987	アジムスルフロン・ピリフタリド・プレチラクロール・ベンスルフロンメチル粒剤	アピロトップ A 1 キロ粒剤 3 6	シジエント	12/24/17
21623	オキサジクロメホン・クロメブロップ・プロモブチド水	黒帯フロアブル	日本農薬	01/25/18
21636	イソウロン粒剤	ハイキック粒剤	ニチン緑化	02/08/18
22310	イマズスルフロン・プロモブチド・ペントキサゾン粒剤	科研ヨシキタジャンボ	科研製薬	12/17/17
22318	テブチウロン・D B N 粒剤	クサダウン V 粒剤	北興産業	01/21/18
22340	プロモブチド・ベンスルフロンメチル・ペントキサゾン	クミアイクサカリテイオーフロアブル	クミアイ化学	02/04/18
23607	イマザピル液剤	アーセナル P W	保工谷アグリテック	01/21/18
その他剤				
12842	ダミノジッド水溶剤	ビーナイン水溶剤 8 0	日本曹達	02/28/18